

氏 名	みや わき ゆき お 宮 脇 幸 生
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学位記番号	論 人 博 第 20 号
学位授与の日付	平成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	辺境の構築

——エチオピア国家支配に抗する少数民族ホールの生存戦略——

論文調査委員 (主査) 教授 福井勝義 教授 山田孝子 教授 田中雅一 教授 太田 至

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、エチオピア西南部の少数民族が国家支配のもとでいかにして辺境化されたのか、それに対して彼らはどのようなに抵抗し、アイデンティティを持続してきたのかを、クシ系農牧民ホールを対象として描いている。今日少数民族の文化や集団アイデンティティは、国家や世界経済の影響を受けて、急速に揺らぎ、一部では失われつつある。そのなかで、少数民族がいまも自らの文化やアイデンティティを維持している地域は、政治経済の中心から隔絶したところにしばしば見いだされる。エチオピア西南部低地も近年まで国家統制がおよばなかった地域であり、その牧畜社会に伝統文化が残っているのは、中央からの地理的・政治経済的な遠さのためであるとみなされてきた。これに対して本論は、この地域が19世紀の末からエチオピア帝国の影響を強く受けてきており、国家支配のもとで民族間関係や集団内の権力構造が大きく再編されたこと、そして従来「伝統的」とみなされてきた文化は、こうした国家支配に抗して構築・維持されてきたものであることを、1989年から2002年にかけての延べ14ヶ月にわたるフィールドワークと歴史資料から明らかにしている。

第一部の「空間のイデオロギー」ではまず、独自の空間イメージに基づくホールの「伝統」を綿密に記述し、それが集団内の権力構造をいかにして支えているのかを明らかにしている。ホールは家父長制社会であるが、それを正当化するイデオロギーは外部と内部を区別する空間イメージに基づいている。内部とは、年齢階梯制にもとづく秩序ある集落世界であり、外部とは、敵対民族のいる世界である(第1～3章)。敵対民族とはホールにとって、暴力的である一方、その血は豊饒をもたらすとされる。そのイメージは、互いに女性を交換するホールの親族集団のイメージが投影されたものである(第4章)。伝統的首長は、外部の敵と交換された女性の両方を表象し、外部と内部を仲介する存在である。ホールの家父長制支配は、土着の集団に首長の両義的な力をコントロールする役割を与えることによって、その正当性が支えられている(第5章)。

第二部の「出来事の歴史」では、19世紀初頭から現在にいたるホールの歴史について検討し、第一部で提示されたホールの「伝統」を歴史的な文脈に位置づけている。19世紀後半のトゥルカナ湖周辺の牧畜社会は、集団がひんぱんに離合集散する流動的社会であった。現在のホールが集団として成立するのもこの頃である(第6章)。19世紀末にこの地域はエチオピア帝国の支配下に入り、離散したホールは高地人に貢納することと引き換えにウェイト川下流に帰還し、「伝統」を再建する(第7章)。イタリア占領期とそれに続くハイレセラシェ帝政時代には、西南部低地は政治的に国家支配の影響を受けつつも、経済的には「無価値な辺境」となる。ホールでは国家との仲介者が権力を握り、仲介者と長老集団、首長筋と仲介者の間に、複雑な権力闘争が続く(第8～9章)。1974年に成立した社会主義政権時代には、国家組織がホールにも浸透する。ホールはこうした国家権力を選択的に受容することで家父長制支配の根幹を守ろうと抵抗するが、「伝統」によってアイデンティティを維持する戦略は、国家支配のなかで自らを周辺的地位に押しやるというジレンマをもたらしている(第10章)。

第三部の「抵抗と救済」では、ホールの人々が現在、どのような形で自らのアイデンティティを構築しようとしているのかを検討し、その戦略が集団内での立場や国家権力との関係によって異なっていることを明らかにしている。まず首長筋の起源伝承から帝国侵略に至る語りを検討することによって、ホールは19世紀以降の歴史を、外部の力をもはや制御できなく

なっていくプロセスとみなしていることを示す。それにもかかわらずこうした語りが継承されているのは、伝統が崩壊した後に、新たな秩序が到来するという語りが付け加えられているからである（第11章）。それに対して、精霊憑依カルトは、高地人の文化表象を導入することにより、家父長制によって支配される女性や周辺の人々に、家父長制支配に対抗する新たな世界観を提示している（第12章）。最後に「伝統」に対抗する一人の仲介者のライフヒストリーと実践が検討され、彼の空間のイメージは、ホールの内部に国家や近代の表象を吸収・同化しようとするものであることが示されている（第13章）。

本論は、従来は国家とは隔絶した地域とみなされてきたエチオピア西南部が、国家支配の影響のもとに大きく再編された地域であることを明らかにした。そして先行研究が静態的な伝統文化とみなしてきたものは、実際は人々が、各自の立場から国家支配に抗するために行なっているダイナミックな実践の現われであることを浮き彫りにした。国家支配に対するホールの生存戦略の分析は、今後のアフリカの牧畜社会研究に対してだけでなく、広く国家支配やグローバル経済のもとでの少数民族の生存戦略を検討していくうえでも有効な枠組みを提示している。

論文審査の結果の要旨

宮脇氏の学位申請論文『辺境の構築—エチオピア国家支配に抗する少数民族ホールの生存戦略』は、多くのデータと歴史文献資料によって、エチオピア西南部におけるホールの「伝統」が、国家支配のもとでいかにして形成されてきたのか、それによってホールが、どのようにして集団の生存をはかってきたのかを説得的に描き出している。

以下の三点に、氏の論文のすぐれた特徴をまとめることができる。第一に、氏の論文はエチオピア西南部の農牧社会に関する高い水準のエスノグラフィーとなっていること、第二に、そこで描かれたホールの伝統や文化をあらためて歴史的文脈におきなおし、その形成過程を国家支配との関連で明らかにするという視点を打ち出したこと、第三に、人々にとって歴史を語ることが国家支配のもとでの集団アイデンティティの維持にかかわり、生存戦略の一環となっていることを明らかにしたことである。

氏の論文がすぐれた人類学のエスノグラフィーとなっているのは、それが膨大な実証的データにもとづいているからである。第一部で描かれているホールの生業・社会組織や文化の記述は、いずれもオリジナルなデータと緻密な分析に支えられており、従来のエスノグラフィーの基準をこえるものである。またそこで明らかにされたホール独自の文化概念は、従来のエチオピア西南部の牧畜民研究に新たな知見を付け加えるものとなっている。この地域の牧畜社会において、敵対民族に対する略奪・攻撃が、文化的なイデオロギーにもとづいている、という指摘は、これまでしばしばなされてきた。だが殺戮も通婚も許容される敵に対するイメージが、自集団内の他の親族集団に対するイメージと共通しているという指摘は、氏が初めて行なったものである。氏は、通婚するけれども殺戮は禁じられる自集団内の関係と、通婚も殺戮も許容される敵対集団との関係を比較したうえで、そのようなイメージを持つことが、常に流動的な社会における集団を境界づける戦略のひとつになっていることを指摘している。こうした視点にもとづき、氏は、この地域一帯の社会の存立構造を、集団としての凝集性よりも、集団間を横切る紐帯の多様性から浮き彫りにしようとする近年のエスノシステム論的アプローチを援用しつつ、民族間を横切る紐帯とそれを切断し境界を構築していこうとする戦略の相互作用に焦点をあてようとする新たな研究領域に挑戦している。

氏の論文の重要性はまた、このような文化や「伝統」をこの地域の政治・経済的な文脈におきなおし、それが国家支配という状況のもとでいかにして形成されてきたのかを明らかにした点にもある。本論において文献資料と聞き取りによってしだいに明らかにされてきたエチオピア西南部低地は、この地域が従来考えられていたように国家支配から隔絶した地域ではなく、むしろその政治的影響を強く受けつつも、経済的なシステムからは疎外された地域であることだった。氏は、このような地域を「辺境」と名づけ、国家支配の影響を受けつつも、完全にその統制下におかれてこなかった状況が、長年にわたる民族間紛争の背景となっていること、また「伝統」を時代の状況によって構築していくことによって、集団アイデンティティを持続させていこうとする戦略を浮き彫りにした。

氏の研究の独創性はさらに、ホールにおける歴史記憶の分析を通じて、人々のアイデンティティがいかに形成されてきたかを示したことにある。これによってエチオピア帝国の侵略についての語りが、ホールの「伝統」の崩壊とその再生を預言

する語りに接合されることで、新たな家父長制秩序の再来を想像させる実践となっていることや、社会の周辺にいる女性や男性たちが、憑依カルトにおいて国家支配のシンボルを導入していくことで、家父長制的な秩序とは異なった世界のあり方を創造していることが明らかにされている。

家父長制的な伝統の維持は、ホールが自らの集団アイデンティティを維持していくための生存戦略であるが、これはエチオピア西南部が政治経済的な意味での辺境であるために可能となっている。他方、このような戦略は、自らを国家の政治システムの下でさらに周辺の地位においやるというジレンマを招いている。氏はこのように、国家の政治支配と周辺化された集団の文化抵抗が会うところに、政治経済的な辺境と文化的イメージとしての辺境がともに構築されるメカニズムを見出し、国家支配下における牧畜社会の現状に新たな視点を提起している。

このように、氏の論文は、エチオピア西南部の牧畜社会をめぐる綿密な記述と、それにもとづいた分析と考察をもとに見事なエスノグラフィーとなっている。また氏がそこで提示した「辺境」の概念は、今後のアフリカの牧畜社会研究に対してだけでなく、広く少数民族を研究していくうえでも、有効な枠組みを提示しており、この研究領域に大きな貢献をしたといえる。

本論文は、以上述べてきたように、1989年から2002年にかけての通算14ヶ月におよぶ現地調査において参与観察と聞き取りから得た具体的データを丹念に分析し、国家支配下における少数民族の生存戦略という現代的な課題に新しい視点を提起している。本研究科 共生文明学専攻 文化・地域環境論講座にふさわしい内容を備えた研究成果として高く評価される。

よって本論文は博士（人間・環境学）め学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年11月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。